

言葉の絵画的性

——デイヴィドソンのメタファー論再考——

はじめに

言語とは何か。言語哲学者や言語学者の多くが支持し、強化してきた見方によれば、個々の言語とは、それぞれ一個の記号システムとして構造化ないしパターン化されたものであり、音声による発話や文字による記述の理解はそのシステムによって可能となっている。つまり、それだけではノイズやインクの染みという「無垢の経験的所与」に過ぎない音声や文字を、我々はあらかじめ（たとえば頭の中に）所有しているシステムによって組織化し、いわばそれに「意味」を与え、理解している、というわけである。

では、そのシステムとは具体的にどのようなものとして想定されているのだろうか。言語学者は、我々のこれまでの言語実践の履歴を集成し、一定の語彙目録および構文論的・意味論的・語用論的な規則のセットとして明示的に取り出すことを目指す。それは言い方を換えれば、言語を実体的に存在するものとして物化する（materialize, objectify）試み

だと言えるだろう。

本稿は、主にD・デイヴィドソンのメタファー論を参照することを通して、こうした「言語の物化」に対する批判を試みるものである。第一節では、無数の解釈に開かれている絵画のような位置にあるものとしてメタファーというものを特徴付けるデイヴィドソンの議論を跡づける。続く第二節では、こうしたメタファーの特徴が、使用法の習得としての言葉の理解と、特定のコンテキストにおいて実際に使用された言葉の理解——すなわち、世界について実際に何ごとかを知ること——、その間の差異を際立たせるものであることを確認する。最後に第三節では、以上の論点をし・ワイトゲンシュタインの議論に接続させつつ、常に新たなコンテキストにおいて使用され常に新たな解釈へと無限に開かれていく「絵画的性」という特徴を言葉が持つがゆえに、従来の「物化」された言語の描像が打ち崩されることを確認する。

古 田 徹 也

一 メタファーの特徴とは何か

メタファーとは何かということに対するデイヴィッドソン自身の議論を見ていく前に、まず、彼が標的としている現代の比喩表現をめぐる議論を簡単に確認しておこう。

比喩表現は、メタファー（隠喩）、直喩、換喩、提喩、活喩（擬人法）など、修辭学や言語学において細かな分類が為されているが、M・ジョンソンがまとめているように（Johnson, 1981: 16-20）、I・A・リチャーズ（Richards, 1936）やM・ブラック（Black, 1981 [1954]）を嚆矢として、現代では特にメタファーをめぐる盛んに議論が行われている。

ブラックは、たとえば「男は狼である」という文について、これがメタファーとして働く仕組みを次のように説明している。「男は狼である」という文は文字通りに受け取るとすればあからさまに誤りである（男は人間であり、もちろん狼ではない）。それゆえ人はここから隠された意味を探り当てようという姿勢に移る。具体的には、「男」という第一主題と「狼」という第二主題のうち、後者の「狼」から連想される「凶暴」や「貪欲」といった通念（ステレオタイプ）を前者の「男」に適用することによって、「男」の特徴の特定の部分を強調し、別の特定の部分を抑制するのだという（Black, 1981 [1954]: 73-5 / 177-9）。ただしブラックは、「男は狼である」というメタファーは「男は凶暴である」や「男は貪欲である」といった文字通りの表現を間接的な仕方では表現しているに過ぎない、と主張するわけではない。むしろ逆に、メタファーを文字通りの表現に言い換えると「不可避的に言い過ぎになり——しかも間違った強調を伴う」（*ibid.*: 79 / 114）という点を強調するのである。

ただし、「男は狼である」という使い古された陳腐な文——いわゆる

「死んだメタファー」——であれば、「男は凶暴である」や「男は貪欲である」といった文に言い換えても何の支障もないと感じる人が多いかもしれない。また、それ以前に、『男は狼である』という文は文字通りには偽である」ということ自体が奇妙だと思われるかもしれない。実際、「男は狼である」というのはまさに常套句と化している文であり、男が狼であるのは真だと理解する方がむしろ自然であって、「男は人間なのだから、当然狼ではない」という、普段は念頭に浮かばないような解釈を経由して偽だと理解する方が手間がかかることは確かである。この点は、「私は鼻が高い」や「彼は怒りに燃えている」、「胸が高鳴る」、「時間を費やす」といった、日常会話に無数に溢れている文も考え合わせれば、より明確となるだろう。これらの「死んだメタファー」は果たして文字通りの表現とどこが違うのか。たとえば「気分が落ち込む」や「成績が上がる」はメタファーなのか否か。そこに明確な線を引くことは困難だろう。

そこで、生きたメタファーとして、アンデルセンの「旅することは生きることである」という詩的な表現を例として取り上げてみよう。この表現から我々は、様々な意味を読み取ることができよう。旅とは一つ所に留まらず常に移動し続けることであること、旅の過程は人生の縮図になっていること、旅をしてこそ生きている実感を得られるということ、等々。子どもに「旅することは生きることである」とはどういう意味かと問われたら、我々はいま挙げたような文を幾つか言って説明するだろう。しかし、そのいずれかの文に（あるいはそれらの文の総体に）完全に置き換えてしまえるというわけではない。むしろ、いま挙げた文はどれも、「旅することは生きることである」という文によって喚起されるものに偏った強調を与えて肥大させており、その詩情を台無しにしてしまっている。デイヴィッドソンはこの点では、「メタファーを文字通

りの表現への言い換えようとすると不可避免的に言い過ぎになったり間違った強調を伴ったりする」というブラックが強調するポイントに同意する。すなわち、「メタファーが何を『意味している』のかを述べようとするとすぐに、言及しておきたいことには終わりが無いのだと気づくことになる」(Davidson, 2001 [1978]: 263/二九〇)とこう点に、まさにメタファーというものの特徴をみるのである。

メタファーの言い換えと我々が呼んでいるものを持つ、その「無限にある」という性格は、言い換えというものが「メタファーが気づかせるものをすべて書き尽くそう」という試みであり、これにははっきりした終わりというものが無いのだという事実に由来する……。(ibid.: n. 17) 「強調は引用者」

問題は、このポイントをどのように解釈するかである。経験主義や論理実証主義は、メタファーというものは感動や興奮といった気分を呼び起こす情緒的 (emotive) な機能しか持たず、世界の諸事実に関する認知的 (cognitive) な機能を果たすものではないとしてきた。ブラックはこの種の主張に反対し、メタファーからの言い換えが不可避免的に言い過ぎになったり間違った強調を伴ったりするのは、それがまさしく独自の認知的内容を持つからだと主張する。たとえば、「旅することは生きることである」が「旅とは一つ所に留まらず常に移動し続けることである」や「旅は生きている実感を与える」等々に言い換えられないのだとしたら、それは、これらの文に「元の命題と同じだけの、情報を伝えた」り啓発したりする力がない」(Black, 1981 [1954]: 79/二四) からだとするのである。「私が最も強調したいことの一つは、このような場合に失われるものが、実は認知的内容だということである。文字通りの表現

言葉の絵画性

への言い換えて問題になる弱点は、いやになるほど冗長になったりうんざりするほど露骨になったりしかねないということではない。また、文の質が劣化することでもない。それは翻訳として失敗なのである。なぜならそれは、メタファーが与えたような物の見方を与えることができないからである」(ibid.)。

デイヴィドソンは、このブラックの議論を次のように批判する。

この説が正しいなどと、どうして言えようか。もしメタファーに独自の認知的内容があるのなら、なぜそれを説明するのがかくも困難だったり、不可能だったりするのだろうか。……もしメタファーが「あることを述べ、別のことを意味する」のであるとすれば、それが意味していることを明示的にしようとしても、その結果があまりに説得力のないものとなるのはなぜなのだろうか。……なぜブラックは、文字通りの表現への言い換えは「不可避免的に言い過ぎになり——しかも間違った強調を伴う」と考えるのか。なぜ不可避免的なのか。我々が十分賢いとするなら、望む限りの近い表現を考え出せるのではないのか。(Davidson, 2001 [1978]: 260/二八六)

デイヴィドソンは、ブラックの議論においては二つの見解が緊張状態にあると指摘する。すなわち、「一方では、メタファーは平易な散文でもともと成しえないようなことを成し遂げているのだと主張したがりがちから、また他方では、その見解は、認知的内容——まさに平易な散文を用いて表現するよう目論まれている類のもの——に訴えて、メタファーが成し遂げていることを説明したいと望んでいる」(ibid.: 261/二八七) という緊張状態である。そして彼によれば、この緊張状態を解かないままメタファーとは何かを説明しようとすることによって、「メタファー

は、ほとんどの場合あからさまに偽であるような文字通りの意味を持つのに加えて、暗号化され隠された意味を「実際に持つ」という観念が生まれてしまう (*ibid.*)。たとえば「旅することは生きることである」は、あからさまに偽であるような文字通りの意味を持ち(すなわち、旅するというのは一つの行為であり、生きるということそれ自体であるわけではない)、かつ、何らかの暗号化され隠された意味を持つ、というわけである。しかし、もしメタファーが本当に隠された意味を持つのであれば、暗号が解読されその意味が露わにされること、すなわち、他の文に言い換えられることが、原理的には可能だということになる。しかしそれは、ブラックが他方では正確に掴んでいるメタファーの特徴、すなわち、文字通りの表現への言い換えは不可避的に言い過ぎになったり間違った強調を伴ったりするということと矛盾する。デイヴィドソンはまさにこの点を突くのである。

デイヴィドソンによれば、メタファーを文字通りの表現に言い換えようとすると試みにきりが無いのは、それが暗号化され隠された意味を持つからではなく、そもそも「言い換えられなければならないようなことは何もないから」(*ibid.*: 246/二六四)に他ならない。隠されたものがあるなら、それを探り当てようという試みはどこかで終わってしまう。何も隠されていないからこそ、「終わりというものが無い」ということがありうるのである。たとえば「旅することは生きることである」という文は、旅とは一つ所に留まらず常に移動し続けることであることや生きていく実感を与えるものであること、あるいはその他の内容を暗号化して隠しているのではない。そうではなく、まさに文字通り、旅することは生きることであることを意味しているのである。つまり「メタファーは、言葉がその最も文字通りの解釈において意味しているものを意味しているのであって、それ以上の何ごとも意味してはいない」(*ibid.*: 245/二六

三)。

ただしデイヴィドソンはここで、「メタファーは感動や興奮といった気分を呼び起こす情緒的な機能しか果たさない」という経験主義や論理実証主義の主張に与しているわけではない(彼自身、そのことをはっきりと明言している (*ibid.*: 246/二六四))。メタファーが日本語では「隠喩」とも呼ばれることから明らかなように、メタファーの作者が読者に対して特定の内容をほめかしたいという目的がありうること、そのこと自体をデイヴィドソンは否定しない。彼は次のように述べている。

もちろん、メタファーを解釈したり解明したりすることは適切でない、ということではない。メタファーの作者が我々に理解してもらいたいと思っていることや、より繊細でより教養のある読者なら捉えられることを、我々が理解すべきだとするならば、我々には多くの助けが必要となる。いわゆる言い換えの適切な機能というのは、怠惰な、あるいは無知な読者に、老練な批評家の描く心象に似たものを持たせることである。言ってみれば、批評家というのは、メタファーの作者と穏やかな競争をしているようなものである。批評家は自分自身の芸術を、原作よりも幾つかの点でより分かりやすい、あるいはより明快なものにしようと努める。だが同時に、元の作品が彼に与えた効果の幾つかを他の人たちのなかに再現しようとも努めるのである。そうすることにおいて批評家はまた、メタファーそれ自身の持つ美しさとか適切さ、その隠された力といったものへと注意を呼び起こすのである。 (*ibid.*: 264/二九一—二)

常套句と化したメタファー(死んだメタファー)や平易な散文と異なる

り、生きたメタファーは、我々にとって一種の謎として現れるが、全く支離滅裂で意味不明な文とは異なり、何らかの解釈が可能であると——しかも無数の仕方でも可能であると——我々に感じさせる。老練な批評家であれば、豊富な知識と明快な叙述によって、一つの解釈に強い説得力を与えたり、あるいは、解釈に拡がりをもたらす源泉そのものに迫ったりもするだろう。下手な批評家は、冗談を解説することでその可笑しさを殺してしまうように、メタファーを言い換えることでその美しさや啓発性を損なってしまうだろう。しかし、真に力のあるメタファーは、どのような解釈に晒されようとも生き続ける。良質な批評家は、むしろそれに繊細さや深みを与え、我々の鑑賞を助けてくれることだろう。

つまり、デイヴィドソンが言いたいのは、「メタファーとは、一種の、そしてある程度の芸術上の成功を含む」(ibid.: 245/二六二)ということである。彼はその意味でメタファーを、音楽における成功した効果になぞらえている。すなわち、「メタファーにおける新奇さや意外さの要素と呼ばれているものは、ハイドンの交響曲第九十四番における驚愕や、よく知られた偽終止における意外さのように、我々が何度も繰り返し体験できる、組み込み済みの美的な特徴なのである」(ibid.: 253/二七三〜四)。また彼は、メタファーを絵画や写真といったものになぞらえてもいる (ibid.: 263/二九〇)。いずれにせよ、ポイントは、メタファーとは音楽の一節や絵画、あるいは写真のような成功した芸術作品に類するものだという点である。そして、成功した芸術作品の特徴は、それを鑑賞する人間を特定の気分させることだけにあるのではなく(そうした点であれば、お世辞や罵倒などによっても達成される)、我々の想像力をかき立て、その作品が何を意味するのか、どのような内容を湛えているのかについて、無数の解釈に目を開かせることにある。メタファーを言い換える試みにきりが無いのは、幾千の命題を並べても、それらを

音楽や絵画や写真といった芸術作品に置き換えることがそもそもできないからなのである。

一枚の写真によって、どれくらい多くの事実や命題が伝えられるだろうか。全くないだろうか、それとも無限にあるだろうか。あるいは、一つの語りえない大いなる事実というものがあるのだろうか。——拙い問いである。一枚の画像は、幾千の言葉とも等価ではない。言葉は画像と交換するには適さない通貨なのである。(ibid.)

もちろん、メタファーもまた言葉ではある。しかし、たとえば「旅することは生きることである」という言葉の意味が問題となり、無数の解釈に開かれているとき、その言葉は「言い換え」という言語実践の主題となっており、その意味で、解釈を待つ絵画(写真、音楽、等々)のようない位置にあるということなのである。

二 言葉の使用法の理解と、 使用された言葉の理解との違い

ある文を別の文に言い換えようとする試みに終わりというものが来ないこと、すなわち、ある文が絵画や音楽等の芸術作品のような仕方での主題となること——言葉がときにこうした性質を持つことは、ここまで見てきた通り、生きたメタファーというものにおいて顕著に浮き彫りになる。しかし、デイヴィドソンは同時に、「私はいかなる言語の使用に関しても同じことを主張するつもりである」(ibid.: n. 17)と述べる。つまり、「旅することは生きることである」という、普段まず使用されないような詩的な文だけでなく、日常で頻出する散文においても、同様の

ことが見出されるといふのである。

たとえば、「石を拾う」といふ文を見てみよう。この文は、それが置かれるコンテクストに応じて無数の意味で使用される。たとえば、近所の河原で石を単に拾うこと、石を拾って自分のものにする事、「石」といふ名字の人間を車でピックアップすること、「石」と名付けた捨て猫を保護して自宅に連れ帰ること、等々。逆に言えば、あらゆるコンテクストから独立に「石を拾う」といふ文がそれ自体として「意味」を持つというのではないし、そのコンテクスト独自の「意味」なるものが、個別のコンテクストでその文がどのように使用されるかをあらかじめ決定する、などということもない。たとえばコンテクストによっては、この文はまさしくメタファーとして使用される場合もあるだろう（会話の中で、非常に面倒な仕事に「石」に見立てられており、その仕事を誰か引き受けるのが問題になっている場合など）。

J・デリダは同様のポイントを、「私は雨傘を忘れた」といふ文をめぐって論じている。この文自体は極めてありふれたものであり、容易に理解可能である。すなわち、この文が表現する典型的な事態がどのようなものか、我々は様々に思い描くことができる（Derrida, 1979: 128）。しかし、この文はニーチェがノートに特に引用符で囲んで書き付けたものである、という事実が附加されると、ニーチェの他の様々な警句と同様、それは我々に一個の謎として立ち現れてくることになる。ここでデリダが強調するのは、ニーチェはこの言葉で最初から何もほのめかそうとしていなかったという可能性である。

書かれたものとしては理解可能なこの未刊の句は、常に秘密のままにとどまりうる。それは、この未刊の句が秘密を保持しているからではなく、常に秘密を欠きうるからである。この句は、その折り

目の中に真理が隠れているように見せかけることができるがゆえに、秘密のままにとどまりうるのである。（*Ibid.*: 132）「強調は引用者」

このデリダの論点は、先に取り上げたデイヴィドソンの論点、すなわち、隠されたものがあるならそれを探り当てようという試みはどこかで終わらざるを得ない、何も隠されていないからこそ「終わり」といふものが無い^①ことがありうる、という論点とまさに共通するものだとと言えるだろう。

「石を拾う」にしろ「私は雨傘を忘れた」にしろ、我々は、前後のコンテクストなしにそれらの文だけを聞いたり読んだりした場合でも、それらが使用される無数の典型的なコンテクストをすぐさま思い浮かべることができる。また、それらの文の意味を聞かれた場合にも、同様に、それらが使用される典型的なコンテクストを様々な提示することによって答えることができる。その限りでは、我々はそれらの文の意味を理解している、とすることはできる。しかし、実際に特定の会話の場面で使用される「石を拾う」の意味や、ニーチェが書き付けた「私は雨傘を忘れた」の意味をどう理解するかは、それとは別問題なのである。デイヴィドソンは、このことから、「言葉の意味を学ぶという作業と、一度その意味を学んだ後で、その言葉を使用するという作業とを区別する」（Davidson, 2001 [1978]: 251/271）ことの重要性を引き出す。我々はたとえば、「石」や「拾う」といふ語、あるいは「石を拾う」といふ文の意味を学ぶという作業を終えている。その基準はまさに、我々がこれらの語や文が使用される典型的なコンテクストを無数に考え出すことができるということによって示される^②。しかしこのことは、これらの語や文が特定のコンテクストにおいて実際に使用された際にそれを理解できることを、あらかじめ保証してはくれないのである（もちろん、理解

の大きな助けとはなりうるだろう)。

デイヴィドソンは、彼がここで際立たせようとしている区別の内実を明らかにするために、次のような例を挙げている。

いま、土星からの訪問者を迎えて、我々がその人に「床」という言葉の使用法を教えているとしよう。……もしその土星人が「床」という言葉の使い方を学び終えたなら、我々は何か新しいこと、例えば、ここは床だということを経験しているならば、我々は世界について何ごとかを語ったことになるのである。(ibid.)

彼が「床」という言葉の使用法を学び終えたということは、この言葉が含まれた無数の文を考え出すことができ、その文が使用される無数のコンテキストを考え出すことができるようになった、ということである。しかし、ここが床であることは、当然のことながら、彼はまだ学んでいない。言葉の使用法を理解すること、実際に使用された言葉を理解することとの違いは、まさにこの点にある。後者は、世界について何ごとかを知ることなのである。もちろん、繰り返すように、あらかじめ「床」という言葉の使用法を学んでおくことは、実際のコミュニケーションの場面で「ここは床だ」と言われた際にその言葉を理解する大きな助けにはなるだろう。しかしそれは、理解できることを保証してくれるわけでも理解の内容を確定させているわけでもない。そして、不可欠であるわけでもない。なぜなら、原理的には、「床」という言葉の使用法について事前に何も学ばずとも、「ここは床だ」という実地の使用を聞いてこの言葉の使用法を知り、かつ、ここが床であるという世界の事実を知ることのできるからである。そして実際、子どもが第一言語(母国語)を

学ぶ際には、まさにそうした二種類の学習を同時に成し遂げているのである。

また、第一言語を学ぶ子どもでなくとも、我々はときに、全く未知の言葉の意味をその場で解釈することを求められるときがある。デイヴィドソンはそうした種類の解釈を、他の箇所「根元的解釈(radical interpretation)」と呼んでいるが(Davidson, 2001 [1973])、同時に彼は、「どんな場合であれ他人の話を理解することは根元的解釈を含む」(Davidson, 2001 [1973]: 125/1131)と指摘する。なぜなら、たとえ既知の言葉であっても、それが使用されるのは必然的に常に新たな状況、新たなコンテキストにおいてである以上、その言葉の過去の使用例をそのまま適用することはできないからである。つまり、特定の言葉の様々な使い方を事前に学習しておくということは、その言葉が実際に使用された言葉を解釈する上で非常に有用な出発点となることは間違いないが、それ以上ではないということである。

三 絵画性の謂いとしての「意味」

こうしたデイヴィドソンの議論に対して、たとえば菅野盾樹は、「意味と使用の区別を絶対化する」(菅野、二〇〇三:二九五)という誤りをデイヴィドソンがここで犯していると批判する。すなわち、「(デイヴィドソンの見方では)語句というものはどう使用されようが、それには影響されない一貫した意味を持つ」(同、二九四)ことになるというのである。

確かにデイヴィドソンは、メタファーについての自分の説明は「言葉が何を意味するかということ、言葉が何をするために使用されるかということとの区別に依拠してゐる」(Davidson, 2001 [1978]: 247/11

六五)と述べ、「メタファーは専ら使用の領域に属する」(*ibid.*)と述べている。また、彼は後年、論文「文学的言語の居所を突きとめる」(Davidson, 2005 [1993])において、「言葉の文字通りの意味」という言い回しを持つ伝統的な意味合いに、論文「隠喩の意味するもの」(Davidson, 2001 [1978])を書いた時期の自分はまだ引きずられていたと回顧している (Davidson, 2005 [1993]: 173/二七三〜四、p.7)。つまり、一九七〇年代当時の彼が、「あらゆる特定の使用のコンテキストとは独立に存在する意味」というものを想定するフレーゲ以来の言語哲学の伝統に未だ引きずられていたことは確かである。

とはいえ、一九八〇年代以降、とりわけ論文「墓碑銘のすてきな乱れ」(Davidson, 2005 [1986])において彼が、そうした伝統と完全に手を切ったことも事実である。彼がそこで鮮明に打ち出すことになるラディカルな言語論が、突如彼の中で生まれたようなものであると考えること、すなわち、一九八〇年代以前と以後の彼の議論が完全に断絶していると考えられることにも無理があると言えるだろう。それから、前節までで確認してきたように、デイヴィドソンが論文「隠喩の意味するもの」において「意味」と「使用」とを区別するポイントは、「旧来の言葉の新しい使用方法を学ぶことと、すでに理解している言葉を使用することを対比すること」(Davidson, 2001 [1978]: 252/二七三)に他ならない。すなわち、この論文で際立たせられている区別は、実質的には、「前後のコンテキストなしにある言葉だけを聞いたときに我々が思い浮かべることのできる典型的な使用法」と「その言葉が実際に特定のコンテキストにおいて持つ使用法」の違いであって、「いかなる使用のコンテキストからも完全に独立した『意味』それ自体」と「使用」との違いではないのである。本稿では、デイヴィドソンの議論に関して一九八〇年代以前と以降とでどこまで連続性が認められるのか、また、精確にはどの時点で断絶が

生じたのかといったことを、これ以上検討することはしない。本稿の目的は、デイヴィドソンのメタファー論から取り出されるエッセンスそれ自体の積極的な意義に目を向け、それがどのような広がりを持ち、言語論一般に対していかなる帰結をもたらすものであるのかを見定めることである。

そのために、ここで参照したいのは、ウイトゲンシュタインの議論である。というのも、デイヴィドソンが自身のメタファー論において強調する「使用法の習得としての言葉の理解」と「特定の場面で特定の内容について語られた言葉の理解」との区別は、後期のウイトゲンシュタインがその思索を紡ぎ始めた際に、すでに視野に入れていた事柄であるからである。ウイトゲンシュタインは『哲学的文法』において次のように述べている。

私がある物語の本のなかほどを開いて、次の文を読んだとしよう。「彼はそう言ってから、昨日と同じように彼女を残して立ち去った」。

私はこの文を理解しているのだろうか。——この問いにはそれほど簡単に答えることはできない。その文は母国語の文であり、その限りでは私は理解している。私は、その文がどのように使用されるものか知っているし、その文の前後のコンテキストを考え出すこともできるだろう。しかし、それでも私は、その物語を始めから読んでいった場合に理解するような意味では、その文を理解してはいないのである (PG: 83)。

私が本をぱっと開いて、目についた文を読む。「彼はそう言ってから、昨日と同じように彼女を残して立ち去った」と書いてある。私はこの文が使用されるコンテキストを様々に考え出すことができる。大谷弘がこ

のウィトゲンシュタインの一節を挙げつつ指摘するように、このレベルでの言葉の理解は画像の把握に似ている。「例えば風景画が、その絵が現実の風景を写生したものであるかどうかを知らなくとも、我々に対しその絵に描かれている風景の存在を示唆するように、言葉を聞くと、それが実際に特定の言語ゲームの中で発せられたのかどうかを知らなくとも、我々にはその言葉の典型的な使用の場面がいくつか示唆されるのである」(大谷、二〇〇九:二)。こうした理解のあり方を、大谷は「像(Bild)の理解」と呼ぶ。重要なことは、「像としての言葉の理解は、特定の言語ゲームの中でその言葉が意味を持つということや、その言葉が発話された言語ゲームを適切に把握しているということを保証するわけではない」(同、三)と「うことである。「彼はそう言うてから、昨日と同じように彼女を残して立ち去った」という文は、もしかしたら、物語の中ではメタファーとして使われているのかもしれない。あるいは、ナセンス文として使われているのかもしれない。また、平易な散文として使われていても、私にはその意味が理解できないかもしれない。いずれにせよ、文が実際に物語の中でどのような意味を持つのか、その意味を私は理解できるのか、それは、その物語を実際に読んでいき、この文に行き当たったときにはじめて判明する事柄なのである。

G・E・M・アンスコムは、ウィトゲンシュタインがなぜ体系的な意味の理論を構築しようとしなかったかを論じる中で、デイヴィドソンや大谷が画像になぞらえて表現する言葉の側面を、「絵画的性(pictoriality)」(Anscombe, 1981: 158)と呼んでいる。彼女は、「我々の言語使用の絵画的性、すなわち、メタファーや言葉の独創的な適用の無限の可能性というものを考慮すれば、形式文法学者たちの企ては失敗を運命付けられている」(ibid.)と指摘するのである。自然言語についての形式的な構文規則(文法)を構築しようという論者、あるいは、形式的な意味の理論

を構築しようという論者は、これまでの言葉の使われ方を分析して再帰的なシステムとして明示化しようと試みる。その成果はたとえばコンピュータ・プログラムに反映させることができるだろう。「床」という語を入力すれば、この語が使用される様々な文や、その各文が使用される大量のコンテキストを表示する、という具合である。しかしそれ自体は、膨大なデータ・ベース(語彙の集積)とアルゴリズム(語彙を結合・分解する構文論的規則)に過ぎない。それはこれからの言語実践において使用される言葉がどう理解されるかをあらかじめ確定するものではないし、これからの言語実践にとって不可欠なものとする言えない。ウィトゲンシュタインが「規則のパラドックス」というかたちで提示するように(Wittgenstein, 1953: §143-201)、これまでの言語実践から帰納的に導き出された規則を、これからの言語実践に対して演繹的に適用しようとしても、言葉が常に新たな状況において使用されるものである以上は、規則からの逸脱の可能性は必然的に存在し続ける。しかし、世界について何ごとかを語るために言葉が実際に使用されるといふ契機を抜きにしては、我々の言語実践について、そこで使用される言葉の意味について、何も描いていないに等しいのである。

それでは、言葉の意味とは、学ぶことができないものなのか。もちろん、言葉が使用される無数のコンテキストを挙げられるようになるという限りでは、学ぶことができる。ポイントは、「意味」なるものは言葉の使用法を将来にわたって規定するようなものとして実体的に存在するようなものではない、ということである。たとえば、『雨傘』という言葉の意味とは何か」と訊かれて、この言葉の様々な使用法を例示すること、あるいは、「私は雨傘を忘れた」という発話に対して「それはどういう意味なのか」と問い、「それはしかしかのことの意味している」と答えること——そうした言語実践において、まさに「意味」という言葉

は使用される。つまり、言葉が意味を持つとは、言葉が何らかの抽象的存在者を持つということではなく、ひとつの言葉をめぐってあらかじめ無数の使用のコンテキストを想定できること、あるいは、実際に特定のコンテキストで使用された言葉に対して無数の解釈をめぐらすこと、そうした、言葉の絵画性の謂いに他ならないのである。意味という概念にまつわるこのような消息を、ウィトゲンシュタインは、講義の中で次のように表現している。

「文の意味」は、「芸術鑑賞」の営みに極めて類似している (Wittgenstein, 1966: 29 / 一八六)。

美術館という会場、展覧会という提示の仕方の中で、ある特定の絵画や彫刻といった同一のものが様々な意味において把握されること、それが芸術鑑賞という営みの特徴付ける。ありきたりの風景画や静物画はその意味が問われること自体がまずないが、特定の作品は、様々な解釈の仕方を喚起しながら、しかも、作者がある適切な見方を示唆しているようにも見える。我々は作者の意図を想像しながら、また、鑑賞者同士でときに話を交わしながら、自らにインスピレーションを与えるような見方も模索する。その錯綜した呼応の中で、作品の一定の解釈が語られるようにもなるが、それは依然として曖昧なものであり、時とともに移りゆく気まぐれなものである。逆に、完全に一定の解釈に収まった作品は、芸術作品としては価値を失ったに等しいだろう。それはかつてあった不穏さを失い、応接間やトイレにひっそりと飾られることになるのである (同様のことは、詩や小説、音楽、映像など、他の芸術作品に関しても言えるだろう)。

この絵画性という特徴は、すでに見たように、メタファーというもの

において顕著に浮き彫りになる。しかし、「時間を費やす」や「石を拾う」といった日常で頻出する文であっても、特定のコンテキストをこと細かに用意してやれば、メタファーとして機能しうる。逆に言えば、生きたメタファーと呼ばれるものの特徴は、「旅することは生きることである」という文がまさにそうであるように、詳細なコンテキストを用意せずともそれだけで多くの人に対して言葉の絵画性それ自体に目を開かせる点にある、と言えるだろうし、詩人の才能と呼ばれるもののひとつは、まさにそのような文を生み出せるという点に求められるだろう。(ただしこの文が、誰にとっても、また、いかなる場合であっても、メタファーとして機能する、というわけではない。「旅する」や「生きる」といった言葉の使用法にあらかじめ通曉していなければ、この文をメタファーとして理解することはそもそも不可能であるし、たとえ通曉していても、何を芸術作品と見なすかについて人々の意見が割れるのが常であると同様に、人によっては——それこそ、旅というものに全く思い入れがないような人であれば——この文をまったくメタファーとして受けとめないという場合もあるだろう。また、たとえば流浪生活など、旅することによってしか生存できないというような特定のコンテキストにおいては、この文はメタファーとして機能することはないだろう。)

生きたメタファーは、言葉の創造的な組み合わせによって、使用法の習得としての言葉の理解と、特定の場面で特定の内容について語られた言葉の理解との差異を際立たせるものである。語彙と規則のセットというかたちで集成され明示化されるような我々のこれまでの言語実践の履歴を、我々は学ぶことができるし、実際に学んできた。しかしそれは、繰り返すように、これからの言語実践において使用される言葉がどう理解されるかをあらかじめ確定するものではないのである。デイヴィドソンはこの点を、「メタファーの意味するもの」発表の五年後に著した論文

「コミュニケーションと規約」において次のように言い表している。

……言語的コミュニケーションは、規則に支配された反復を、極めて頻繁に利用するにもかかわらず、要求はしない。そしてその場合、規約 (convention) が通常の——しかし偶発的な——特性を記述しているかもしれないとしても、規約は、言語的コミュニケーションにとって何が基本となるかを説明する助けにはならない (Davidson, 2001 [1983]: 279-80/三二八)。

以上のように、言葉の持つ「絵画的性」という特徴によって、「言語とは、実際にコミュニケーションが為されるのに先だって、語彙と規則のセットのようなシステムとして明示化しうる存在者である」という、従来の「物化」された言語の描像は打ち崩される。それでは、従来の言語観に置き換えるべきものとして、どのような描像がありうるのだろうか。たとえばデイヴィドソンは、論文「墓碑銘のすてきな乱れ」(Davidson, 2005 [1986]) およびその後記と言える「言語の社会的側面」(Davidson, 2005 [1993]) において、「もし言語が、多くの哲学者や言語学者が考えてきたようなものであるとするならば、そのようなものなど存在しない」という標語と共に、「他者とのコミュニケーションにおいて世界に通曉していくこと」として言語的能力の獲得を特徴付けていくことになる。しかし、紙幅はもはや尽きている。この彼の議論に関しては、稿を改めて取り上げることしたい。

註

- (1) デリタとデイヴィドソンの議論の親近性については、S・C・ウィーラー (Wheeler III, 1986) や森本浩一 (森本, 一九八七:二〇〇四・九九) —

言葉の絵画的性

- (2) あるいはその基準は、デイヴィドソンのように真理条件意味論を採用するならば、これらの語や文に対して「特定の使用のコンテキストから独立に、文字通りの意味と文字通りの真理条件を割り当てることができる」(Davidson, 2001 [1978]: 247/二六五) というものとして定式化することもできるだろう。たとえば、「石を拾う」という文が真となる典型的な条件を様々に挙げられるということが、この文の意味を知っている(意味を学び終えている) ことの基準となる、という具合である。ポイントは、真理条件意味論であれ、他の意味の理論であれ、「理論」というかたちで表すことができる事前の知識体系は、特定のコンテキストにおいて実際に使用される文の理解をあらかじめ保証するようなものではない、ということである。

- (3) ウィトゲンシュタインは『探究』第五二五節においても再びこの問題を取り上げている。

「彼はそう言うてから、昨日と同じように彼女を残して立ち去った」——私はこの文を理解しているのだろうか。私はこれを、一つの報告の経過の中で聞くときと同じように理解しているのか。この文がそこで孤立しているのなら、私はそれが何を扱っているのか分らない、と言うだろう。しかし私は、人がこの文章をどのように使用できるかは分かっているだろう。私は自分でこの文のコンテキストを発明することができるだろう。

(たぐさんのよく知られた小径が、これらの言葉からあらゆる方向に向かって通じている。)(Wittgenstein, 1953: 852b)

ウィトゲンシュタインは、続く第五二六節では画像の理解と文の理解とを類比させ、第五二七節では、「言語の命題を理解することは、人の考える以上に、音楽における主題の理解に類似している」(ibid.: 857) と述べている。

- (4) 意味の「物化」に抗して、ウィトゲンシュタインは次のようにも述べている。「意味するということとは、この語に付随して起こる出来事なのではない。なぜなら、いかなる出来事も、意味することの諸々の帰結を引き出すことができるであろうから」(Wittgenstein, 1953: p. 218/四三五)。

文献

- Anscombe, G. E. M., [1981]: "A Theory of Language?" in *Perspectives on the Philosophy of Wittgenstein*, edited by I. Block, The MIT Press, pp. 148-58.
- Black, M., [1981 (1954)]: "Metaphor" in *Philosophical Perspectives on Metaphor*, edited by M. Johnson, University of Minnesota Press, pp. 63-82. (First published in *Proceedings of the Aristotelian Society*, 55, 1954.) (『隠喩』尼々崎彬訳『創造のレトリック』佐々木健一編『勁草書房』二〇一九頁。)
- Derrida, J., [1979]: *Spurs: Nietzsche's Styles: Éperons: les Styles de Nietzsche*, translated by B. Harlow, University of Chicago Press.
- Davidson, D., [2001 (1973)]: "Radical Interpretation" in his *Inquiries into Truth and Interpretation 2nd. ed.*, Clarendon Press, pp. 125-40. (First published in *Dialectica*, 27, 1973.) (『根元的解釈』『真理と解釈』野本和幸・植木哲也・金子洋之・高橋要訳『勁草書房』一九九一年、二二二〜四三頁。)
- Davidson, D., [2001 (1978)]: "What Metaphors Mean" in his *Inquiries into Truth and Interpretation 2nd. ed.*, pp. 245-64. (First published in *Critical Inquiry*, 5, 1978.) (『隠喩の意味』『真理と解釈』二二六〜二九六頁。)
- Davidson, D., [2001 (1983)]: "Communication and Convention" in his *Inquiries into Truth and Interpretation 2nd. ed.*, pp. 265-80. (First published in *The Journal of the Indian Council of Philosophical Research*, 1, 1983.) (『コミュニケーションと規約』『真理と解釈』二九七〜三三〇頁。)
- Davidson, D., [2005 (1986)]: "A Nice Derangement of Epitaphs" in his *Truth, Language, and History*, Clarendon Press, pp. 89-107. (First published in *Truth and Interpretation: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson*, edited by E. Lepore, Blackwell, 1986.) (『墓碑銘のすゝめ』『真理・言語・歴史』柏端達也・立花幸司・荒磯敏文・尾形まゆみ・成瀬尚志訳『春秋社』二〇一〇年、一四二〜一七四頁。)
- Davidson, D., [2005 (1993)]: "Locating Literary Language" in his *Truth, Language, and History*, pp. 167-81. (First published in *Literary Theory after Davidson*, edited by R. W. Dassenbrock, Pennsylvania State University Press, 1993.) (『文学的言語の居所を突きとめる』『真理・言語・歴史』二六四〜二八八頁。)
- Davidson, D., [2005 (1994)]: "The Social Aspect of Language" in his *Truth, Language, and History*, pp. 110-25. (First published in *The Philosophy of Michael Dummett*, edited by B. McGuinness, Kluwer, 1994.) (『言語の社会的側面』『真理・言語・歴史』一七五〜二〇一頁。)
- Johnson, M., [1981]: "Introduction: Metaphor in the Philosophical Tradition" in *Philosophical Perspectives on Metaphor*, edited by M. Johnson, University of Minnesota Press, pp. 3-47.
- 森本浩一 [一九八七]: 『隠喩とロマンティック——デリタとナイビッドン ンの場合』『現代思想』一五(六)、『青土社』九〇〜一〇四頁。
- 森本浩一 [二〇〇四]: 『デイヴィッドソン——「言語」なんて存在するのだろうか』『日本放送出版協会』。
- 大谷弘 [二〇〇九]: 『ヴァイトゲンシュタインの哲学的方法』『哲学会第四十七回研究発表大会発表原稿』。
- Richards, I. A., [1936]: *The Philosophy of Rhetoric*, Oxford University Press.
- 菅野盾樹 [二〇〇三]: 『新修辞学——〈反哲学的〉考察』『世織書房』。
- Wheeler III, S. C., [1986]: "Indeterminacy of French interpretation: Derrida and Davidson" in *Truth and Interpretation: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson*, edited by E. Lepore, Basil Blackwell, pp. 47-94.
- Wittgenstein, L., [1953]: *Philosophical Investigations*, Basil Blackwell. (『哲学探究』〈ヴァイトゲンシュタイン全集八〉藤本隆志訳『大修館書店』一九七六年。)
- Wittgenstein, L., [1966]: *Lecture and Conversations on Aesthetics, Psychology and Religious Belief*, Basil Blackwell. (『美学』『心理学』及び『宗教的信念』の三つの講義と会話』『講義集』〈ヴァイトゲンシュタイン全集一〇〉藤本隆志訳『大修館書店』一九七七年、二二二〜二五九頁。)
- Wittgenstein, L., [1969]: *Philosophische Grammatik*, Suhrkamp. (『哲学的文法』〈ヴァイトゲンシュタイン全集三』四〉山本信・坂井秀寿訳『大修館書店』一九七五年。)